

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ラブ魂

【作者名】

GO サマ

【あらすじ】

読み切りって意外と連載に繋がるよね。

ラブ魂

『ひなた温泉前』、ひなた温泉前』……』

「……くう……んあつ？」

なんだもつ着いちまったのか。

……ふわああああああ……」

路面電車が止まり、人が次々と降りて行く……ほど人は乗っていない、

銀髪パーマで死んだ魚のような目をした男1人降りただけだった。

その男の名は『坂田 銀時』

かつて『天人』との戦争で『白夜叉』の異名を持ち、敵・味方ともに恐れられた『侍』である。

「だいたいよ……こういうのは『プロローグ』的なものがあんのが普通だろうが。『なの魂』然り『ゼロ魂』然り……」

イキナリ本編始めやがって……初めて俺のことを見る読者が勘違いするだろうがっ!!

『あれっ？ 銀さんって赤 先生の作品に出てんだ。』って勘違いされたらどうすんだ？ この作者は!!

しかもなんで『ラブひな』

普通は『ネギま』とのクロスオーバーじゃないのっ

俺魔法使えると思っ張り切ったら、何処だよコッコツ!!

温泉郷だよ温泉郷っ!!

なに？ また『スタンド』との戦いみたいなのがあるのっ

冗談じゃないからねっ

あんなのが何回もあっちゃ銀さん体

持たないからっ!!

ぶつくさ言いながら銀時はいつの間にか長い階段を登っていた。

「…たくっ、まあいいけどよ。」

この先の旅館にはイチゴ牛乳がいっぱいあるってバアさんも言っていたし、イチゴ牛乳があるんなら全てOKだ。」

銀時は軽い足取りで階段を上がって行った。

そして一番上に着くとそこには風情のある旅館があった。

「ここだな。バアさんが言っていた『ひなた旅館』つうのは…」

思ったよりデケーな。もう少しこじんまりとした旅館だと思っただんだが……」

そして銀時は玄関に入って行った。

「すいませー……んっ!!」

あゝ、バアさんに頼まれてきた坂田ですけどお……!!」

……シー……

物音一つしない。

どうやら誰もいないようだ。

だけどそれに気づかない銀時は……

「あのお……!!」

バアさんに頼まれてはるばる江戸からやって来た坂田 銀時なんですけどお……!!」

……シー……

もう一度大声で叫んだ銀時。

しかし、誰もいないので返事は返って来ない。
次第に銀時はイラつき始め、額に血管が浮き始めた。

「あのおーっ!! すいませえーっ!! んっ!!
源外のクソじじいの実験で異世界に飛ばされたところオ、このクソババアに拾われてエ、この管理人になる為に、江戸からやって来た『万事屋 銀ちゃん』の坂田 銀時というものですけどオーっ!!」

……シー……

やっぱり返事は返って来ない。
そしてついに銀時の堪忍袋の尾が切れた。

「おい「ラァ」!!

新しくやって来た新人に対して、無視とはどう言ってもりですかっ!!

普通誰かいんだろっ!! 歓迎会的なものがあるのが社会人として常識なんじゃないですかア!!

取り敢えず!! バアさんが言っていたイチゴ牛乳よこせコラァ!!
こちららイチゴ牛乳のために2時間も糖分とってないんじゃないコラァ!!

ドスドスドス……

勝手に上がる銀時だった。

糖分をとっていない為、若干イライラしている銀ちゃん。
とりあえず台所に行くことにした。

台所に向かう途中、ふと銀時の足が止まった。

「…ムジムド……」

台所って……どこだっけ？」

「たくっ……ようやく見つけたぜ。」

「この間取り広すぎんだよ。案内板くらい出せコラァ。」

ようやく台所にたどり着いた銀時

お目当てのイチゴ牛乳を手に入れるため、彼は1時間も旅館を探索していた。

「階段下に『秘密の入り口』って書かれていたところ入ったら、訳の分からない部屋に着くわ、この旅館の一部屋に入ったら一面ジャングルだわ、

ドア開けたら温泉に繋がってるわ……」

なにこの旅館？ 本当に旅館なの？

なんでこんなにアドベンチャーなの？ ここのお客さんはイン
ディージョーンズみたいな人が多いの？

俺はただ台所に行きたいだけだよ？

イチゴ牛乳飲みたいだけだよ？

なんでこんなに疲れるの？ そのうちムー大陸の入り口とかがあり
そうだよここ？」

銀時はかなり疲れた様子で愚痴り始めた。

所々服が汚れているのはそのせいであろう。

「まあいいや。」

さてと、イチゴ牛乳を頂くかね。」

銀時は冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の中には……………

「んだコレ？」

バナナがいっぱいあるんだけど？

なに？ ゴリラでも飼ってんの？

もしかしてさっきのジャングルか？

あのジャングルにゴリラいんのか？

マジかよ〜。

ゴリラなんてあのストーカーで十分だっつうのっ！！

…それよりイチゴ牛乳は……………」

ドサツ！！

銀時の後ろから何か物を落とした様な音がした。

「あん？」

銀時のが振り向くと、女の子が買い物袋を落としていた。

ショートカットの中学生ぐらいの女の子が銀時を指差しながらプルプル震えていた。

「ん？ ん？ ん？ ん？ ん？ ……………」

「ん？ ん？ ん？ ……」

悪いけれど俺ア指輪の魔法使いじゃないから、変身できね〜ぞ？」

すると女の子は大きく息を吸い込み……………

「すじゅっ………ドロボー………」

大きく叫んだ。

どこにそんな大声出せるのか不思議だが、その声を聞いた銀時は…

「オィィィ………ッ!!

誰がドロボーだっ!!

俺はただイチゴ牛乳をだなっ!!

「なんやしつぶ!!

ドロボーが来たんか

今度は褐色の女の子が来た。

明らかに外国人だが、大阪弁を話している中学生ぐらいの女の子だ。

「よしっ!!

ウチに任しときい!!

ウチの新作メカの出番やっ!!

外国人の声と共に戦車のおもちゃみたいなのが出てきた。

褐色の彼女の手にはラジコンのコントローラーみたいなのを持っている。

「いつけえ………っ!!

ドオオンッ!!

褐色の彼女の号令と共に打ち出される弾丸。

「のわたっ!!

それをギリギリでよける銀時。

目標を失った弾丸はそのまま銀時の後ろの冷蔵庫に当たり、爆発した。

ドガアアアンツ!!

ドシャアアアアアアアツ!!

「ちよっ、待てえーーーーー!!

それ、おもちゃじゃねーのかよっ!!」

爆風を受けて部屋から飛び出た銀時は………そのまま一目散に逃げた。

「オイオイオイオイオイオイオイイイイーーーーーツ!!

なんだここはーーーーー!!

なんで明らかに中学生ぐらいの女が、実弾ぶつ放す戦車のオモチヤ持ってたあーーーーーっ!!

ナニコソツ

軍隊 軍隊ですかつ!!

あのチンピラ警察養成所かここはーーーー!!

やべえよっ!! こんなとくに居たら俺の命がナンボあっても足りねーよっ!!

帰ろっ!! うん、帰ろっ!!

もう十分やったよ俺!! そもそもこの作品の主人公じゃないしい!!

ここで頑張る必要はないからね俺っ!!

こんなん作者の思いつきに過ぎないからあ!!

さっさと江戸に返せ作者アーーーーーツ!!」

…なにやらめちやくちなことを言いながら全速力で走っている銀時。

その後ろには先ほどもメカが、6体に増えていた。

「いい加減しつこいんですけどぉー……………!!
それになんて増えてんのっ

明らかに銀さん殺す気満々じゃねえーかっ!!」

階段付近に近づくと、階段麓に高校生ぐらいの黒い長髪の女が立っていた。その女の左手には日本刀を持っていた。

「ここの物を盗むとは……………運が悪かったな、盗人。」

そう言つや否や女が足を出し、銀時の足を引っ掛けた。
銀時は足に引っかかり転がって行った。

「のわっ!!」

「ゴロゴロゴロゴロ……………ドスンッ!!」

「いたたたたたたたっ!!」

「ハゲるっ!! 頭がハゲるっ!!」

そのまま玄関を飛び出て、木にぶつかりようやく止まった。

その音を聞きつけたのか、先ほどの女とは別の女が2人現れた。

「ちゅっ!!」

「何よっ!! 今の物音はっ!!」

「あ……………なるっ?」

「どいつやらロボーが来たみたいやで?」

「ドロボーッ」

どこんどいのよっ そのドロボーはっ 「

「ほらあそこにいるやろっ」

木に頭ぶつつけて転がりまわつとる銀髪パーマの男が。」

「男っ

……これだから男はー！ー！ーっ!!」

ズンズンズンズンっ と音を立てながら銀時に近づくとメガネをかけた女

その後ろをついて行く狐目の女

さらにその後ろをついて行く、先ほどまでの女の子たち。

ようやく銀時が頭の痛みが取れて頭を上げると、周りを女の子たちが銀時を取り囲っていた。

銀時は口を引くつかせながら…

「何なんですかこのヤローッ!!

いきなり銃弾ぶっ放すわ、足引っ掛けられるわ……………

これが新しく来た人に対する挨拶ですかあ~~~~~」

するとメガネの女が銀時に指を指し

「しるさいわよっ!!」のドロボー!!

少しでも反省していたら、見逃してあげようと思ったけど!!

もう許さないわっ!!」

「…初めから許す気ないやん。」

狐目が何か呟いた。

「カオラ、素子ちゃんっ!!

「いや、あの男も災難やな。」

「ここ以外やったら無事やったかもしれへんにな。」

そう言っつて狐目は銀時の方を見る。

そこには先ほどの攻撃で土煙が舞っていた。

「……………オイオイ、何勝手に俺に勝った様な雰囲気だしてんだこのヤロー。」

「……………」

「……………」

全員が驚愕して土煙の方を見る。

土煙が晴れると、頭から血を流し服も所々汚れている銀時が立っていた。

「ガキのオモチャ遊びにしては物騒すぎんだろーがっ!!」

ガキはおとなしく着せ替え人形で遊んでやがれええええええっ!!」

銀時は素早く木刀を抜き戦車のオモチヤを一瞬で全て破壊した。

「くっ!!」

黒髪の女が刀を銀時に振るう。

しかし銀時はいとも簡単に木刀で受けた。

「オイオイ…そんな太刀筋じゃあ……」

俺を倒すことはできねえええぞお!!」

銀時は黒髪の刀を持っている手首を握り、投げ飛ばす。

その際に女から刀を取り上げる。

一連の流れを一瞬でやり遂げた。

よつやく状況が飲み込めたメガネ女が…

「あ、あんた……何者?」

「あん? なんだチミはってか?」

銀時は木刀をしまい首筋を掻きながら今更ながらの自己紹介を行った。

『万事屋 銀ちゃん』のオーナー『坂田 銀時』です。

特技は寝ること、好物は甘いもの

ここのバアさんに頼まれて『管理人』になりました。

文句あるかこのヤロー。」

これが、『白夜叉』と『東大受験生』の奇妙すぎる出会いだった。

この先どうなるのか……

それは……

作者もわからない。